

太田川護岸整備

広島県広島市中区
広島電鉄市内線「原爆ドーム前電停」
から徒歩3分

Bank of the Ota River

撮影：1.4.6.7.小野寺康 2.田中尚人 3.5.真田純子

川を通して市民を繋ぐ「川まちづくり」

広島市太田川は河岸緑地が特長である。原爆ドームより上流の基町護岸は沿川の中央公園などの景観を取り入れ、石積みの護岸の歴史的な景観を継承する親水設計を行った(太田川基町環境護岸・昭和58(1983)年竣工)。なかでも空鞘橋上流は、堤防から低水護岸までを伸びやかな寺勾配のり面として、背景の公園の緑に付け合わせるとともに、凸型の法線の膨らみを生かし、ゆったりとして閑雅な山紫水明景を目標とした。一方で、空鞘橋下流左岸は、アーバニティの高い中流堀込河道として格調が高く、メリハリの利いた直線間知地石垣をモチーフに使っている。橋の上下流は異なったコンセプトを採用しているが、低水護岸は統一感を持たすために、親水性の強い玉石積みで通した。

上流部では低水護岸天端付近では土工に微妙なひだをつけて、座り心地を良くしてある。下流部は河道法線が凹型であるため、見通しがきき単調になりがちであるため、上部直線護岸を2カ所切り欠き、緩斜面土工として空間の分節化をねらった。土工の尻は石垣土留めとして、要所に小階段を切り込み、テラス部へ繋げ随所に、ヒューマンスケールの入隅、出隅、上段下段と変化に富んだ多層分節構成とし、多様な利用形態ができるようにした。

原爆ドーム下流側には、河岸テラス群がある。従来の雁木をモチーフにした平和記念公園下のテラスなどがそれである。また元安橋のたもとには、「聖域」としてふさわしい水辺のあり方を考え、落ち着いた溜まりのスペースが出来、原爆ドームを眺める場ともなるように、水辺に張り出したバルコニー空間を整備している。

戦後「水の都」広島のみちづくりにおいて、これらの整備が果たしてきた役割は大きい。護岸や水制工、高水敷の遊歩道など中村良夫や北村真一らの一連の太田川基町環境護岸の調査・計画・設計から30年経った今、広島の水辺ではオープンカフェや雁木タクシーと呼ばれる水上タクシーなど、市民と行政との協働により「水辺を使う文化」が醸成され、様々な川まちづくりが展開されている。中でも、空鞘橋上流の水辺に残されたポプラを巡る物語は、中村良夫も作り手と使い手がともに紡ぐ「風景の連歌」として称賛している。台風により倒壊したポプラは、「NPOポプラヘアレンツクラブ」により現在ヒコバエが「三代目」として植樹され、周囲の高水敷では屋外映画鑑賞や結婚式、フリーマーケットなどが開催され、まさに市民の憩いの場となっている。

平成15(2003)年、公益社団法人 土木学会デザイン賞特別賞受賞。
(真田 純子)



1.元安橋橋詰テラスに設けられたオープンカフェ



2.市民に利用される河岸緑地と雁木タクシー



3.都市的にデザインした基町護岸(空鞘橋下流)



4.原爆ドーム下河岸テラス



5.ゆったりとデザインした基町護岸(空鞘橋上流)



6.元安橋橋詰テラス全景



7.第一号の河岸テラスから原爆ドームを臨む

安田川 馬路村農協前水制

Groins at Umaji-mura JA, Yasuda River

高知県安芸郡馬路村
土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線「安芸駅」から
車で50分

資料提供：株式会社 西日本科学技術研究所

川の流れ・営みを、 本来の姿に近づける仕事

安田川は、高知県東部の馬路村に源を発し土佐湾に注ぐ流程約30kmの川である。その清浄な水は、醸造業やゆず加工品などの産業に利用され、また、安田川のアユは、「利き鮎全国大会」で二度のグランプリを受賞している。ところが、河道の変化のためか、アユの漁獲高が年々減少し始めた。危機感を抱いた村では、「安田川を美しくする馬路地区村民会議」で対策を協議し、安田川に瀬と淵を再生する試験施工を実施することにした。

依頼を受けた福留脩文(株式会社西日本科学技術研究所)は、地元高知の生まれである。かつては地場の土木建設業者の一人だった。自然をコンクリートで固めてしまう当時の土木のあり方に疑問を持ち、スイスで近自然工法と出会う。以来自然共生と持続可能な地域開発に貢献する理想を胸に、エンジニアの立場から河川環境の再生を提唱し、普及と実践に取り組む日々が30年近く続くこととなる。

安田川の馬路村農協前につくられた水制は、福留が挑戦を重ねて成熟させてきた、水流と土砂移動をコントロールする考え方の一つの到達点を反映した仕事である。川の地形から出水時の水と土砂の動きを大局的につかむ。そして無理なく水を呼び寄せると、できるべき位置におだやかな淵が、また波だって流れる瀬が、川の自らの営力で蘇る。

施工後の平成20(2008)年と21(2009)年に行われた魚類調査では、水制設置区において魚類の生息密度が大きく増えていることがわかり、最も重要な水産資源であるアユの生息密度は、周辺の4倍に達していた。

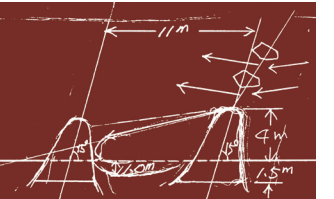
福留は平成25(2013)年12月、癌により70歳で逝去。彼が培った、川を見る目、流れを制御する方法論、石を組む技、そして川と地域への情熱は、日本各地で川に携わる人々に受け継がれている。(西山 穂)



アユの漁獲高が年々減少しつつあった改修前の安田川
全体が偏平に浅くなり、瀬・淵のメリハリがない。



伝統的な河川工法について解説する福留脩文



流水をコントロールするイメージ
河岸を守りつつ、強い流れを集中させて深みを創出する。



荒廃した河道に瀬と淵を再生するべく実施された試験施工(上右左とも)



完成した水制と置き石群
増水時に強い流れが集中する場所にと置き石を設けると、流速を増して砂レキを押し流す。その結果、水制の下流に淵が創出された。



水制・置き石の周囲にはアユがやってきていた。



淵をつくる水制・置き石群
中央上に二基の水制工が見え、その先端から下流に静かな水面が見える。静かな水面は淵があることを示している。



瀬をつくる置き石群
川を斜めに横断して設置した置き石群により、白波の立つ瀬が創出された。